

カビール『ビージャク』和訳余滴

——ブラーフマン（バラモン）の知性の30詩節——

橋本 泰元

1. はじめに

本稿は前稿に続いて、既刊の拙訳『宗教詩ビージャク—インド中世民衆思想の精髓』（平凡社「東洋文庫」703, 2002年）において、いくつかの理由によって省略した部分、すなわち第2番目の「サバド」（正師のことば）の後半に置かれており、バナーラス市以東とビハール州西部地帯の民衆の歌謡の形式で著わされているとされている詩篇8箇のうち、第2番目の部分を翻訳したものである。

この部分の標題は「ヴィプラマティースイー」（Vipramatīsī）といい、宗派内の伝統的な解釈によれば、ヴィプラ（vipra）すなわちブラーフマンの知性（matī）を語る30（tīsī）の詩節の意味である。詩型は、一行が16拍+16拍から成るチャウパーイー形式で、全体が30行から成っている。上記訳書中の第1詩篇である「ラマイニー」もチャウパーイー形式であるが、そこでは二行で一詩節を成して、一般的なチャウパーイー詩の形式を成している。この点において本編は相違している。

概要は、ヒンドゥー教の学僧一般の形骸化した祭式主義を非難するものであり、最後のまとめの部分にあたる「サーキー」には、開悟した導師としてのカビールの峻厳な姿勢が表されていると言えよう。

なお原文には番号が付いていないが、便宜上、訳者が付けた。底本、訳注略号は、上記拙訳書を参照頂きたい。

1. sunahu sabhana mili vipramatīsī/hari binu būṛī nāva bharīsī//

みな集ってヴィプラマティースイーを聴け、ハリ（神）がなければ、
重い舟は沈む。

2. bāmbhana hoyā ke brahma na jānai/gharamā jagya patigraha ānai//
ブラフマン（バラモン）でありながらブラフマンを知らず、〔施主の〕家で祭儀を行い布施を受ける。

3. jihim̐ sirijā tihim̐ nahim̐ pahicānaiṁ/karama dharama mati baiṭhi
bakhānaiṁ//
創造主を見極められず、祭儀の法のみ考えて説く。

4. grahana amāvāsa aura duījā/svāṁti pāṁti prayojana pūjā//
蝕、新月そして第二日、鎮静、列座、〔多くの種類の〕祭儀の企て。*

*「第二日」を BPP は、「ヤマの第二日目」と解釈している。

「ヤマの第二日目」は、『パヴィシユヨーッタラ・プラーナ』の記述に従えば、第八月であるカールッティカ月（西暦10～11月）の白半月第二日目に、死神ヤマを宥めるために行われる斎戒（ヴラタ）であり、姉妹は兄弟の寿命を奪わないように死神に祈願する。この日に、兄弟は（既婚の）姉妹の家を訪ね食事をとり、額に印（ティーカー）を付けてもらい、代わりに贈物をする慣行がある。また、ヤマの良き妹であるヤムナー川で、沐浴することになっている。この祭礼は別名「兄弟の第二日目」とも呼ばれている。

「鎮静」とは、注釈書によれば、星の占星術上の悪影響を除去してもらう儀礼のことである。「列座」は、祭儀を行う司祭僧の列座のことと思われる。

5. pareta kanaka mukha antara bāsā/āhuti satta homa kī āsā//
幽霊の口の金貨に欲を抱き、〔火葬の薪に〕供物を投じて真正のホームを期待する。*

*注釈書によれば、「幽霊」とは亡くなったばかりの人を指し、死者の口に金を入れるのは、死者が幽霊にならないようにするためである。

「ホーム」は、ヴェーダ以来の祭儀であり、司祭僧は聖火に供物を投げ焼灌して現世利益を祈願し、施主からの施与を

もらう。

6. kula uttima jaga māhiṃ kahāvai/phiri phiri madhyama karama karāvaiṃ//

〔ブラーフマンの〕家系は最上と世間で言われているが、〔施主の家々を〕廻りまわって中くらいの祭儀をなさしめる。

7. suta dārā mili jūṭho khāi/hari bhagtā ko chūti lagāi//

子供、妻とともに〔供物の〕残滓を喰らうが、ハリ（神）の帰依者に穢れをつける。*

*「穢れをつける」というのが直訳であるが、その意味は「不可触とみなす」である。

8. karma asauca ucisṭā khāi/mati bharisṭa jama loka sidhāi//

〔ブラーフマンの〕祭儀は不浄で残滓を喰らい、考えは愚劣でヤマの世界（地獄）に直行する。

9. nahāya khori uttima hvai āye/visnu bhagta dekhe dukha pāye//

罪を洗い落とし清らかとなっても、ヴィシュヌの帰依者を見て苦悩する。

10. svāratha lāgi rahe bekājā/nāma leta pāvaka jimi ḍājā//

我欲に溺れ無益〔な行為〕を続け、〔真正の帰依者の〕名前を聞くや烈火の如く怒り出す。

11. rāma krisna kī choṛinhi āsā/parhi guni bhave kritama ke dāsā//

ラーム、クリシュナへの信を捨て、〔祭儀書を〕読み唱えて見せかけの行為の奴僕となった。

12. karama parhaiṃ au karama ko dhāvaiṃ/je pūchai tehi karama diḥāvai//

祭儀を学び祭儀のために走り回り、人が尋ねればその祭儀を教える。

13. nihakaramī kī nindā kījai/karama karai tāhī cita dījai//
祭儀を信じない者を非難し、祭儀を行う者に心を配る。
14. bhagti bhagavāna kī hridayā lāvai/hiranākusa ko pantha calāvai//
最高神への帰依を心に起こすも、ヒラニヤカシプの道を始める。*
*『バーガヴァタ・プラーナ』によれば、魔王ヒラニヤカシプは、
ヴィシュヌ神の敬虔な信者である息子ブラフラダをあらゆる
手段で殺そうとしたが、ヴィシュヌ神の化身である人獅子のヌ
リスインハによって誅殺された。(上村勝彦『インド神話』ちく
ま学芸文庫、2003年)
15. dekhahu sumati kera paragāsā/binu abhiantara bhaye kritama ke
dāsā//
〔ブラーフマンたちの〕善意の威光を見よ、心〔の光輝〕なく見せ
かけの行為の奴僕となった。
16. jāke pūje pāpa na ūrai/nāma sumirinī bho mā būrai//
〔神々の〕礼拝供養しても罪は消えず、〔その神々の〕名号を憶念
して苦海に沈む。
17. pāpa punna ke hāthahi pāsā/māri jagata kā kīnha bināsā//
福德の絹索を手に持ち、〔生類を〕殺して世界を破壊した。
18. ī bahanī kula bahani kahāvaiṃ/ī griha jāreṃ ū griha māreṃ//
これ（世界）は火〔に包まれ〕家は火〔に燃えている〕と言われ、
こちらの家を焼きあちらの家を壊す。
19. baiṭhe te ghara sāhu kahāvaiṃ/bhītara bheda mana mukhahiṃ
lagāvaiṃ//
彼は家に坐す善良な人と言われるが、腹蔵あって心が口に出る。
20. aisī vidhi sura vipra bhanījai/nāma leta pīcāsana dījai//

(24)

〔人々は〕こうして〔地上の〕神とヴィブラを呼び、名前を聞くや高座を用意する。

21. būṛi gaye nahiṁ āpu sambhārā/ūñca nīca kahu kāhi johārā//

〔ヴィブラは苦海に〕沈み己を救えなかった、誰を高い〔ヴァルナの者〕か低いかと言って礼拝したらよいのか。

22. ūñca nīca hai madhdha kī bānī/ekai pavana eka hai pānī//

高い低いはどうでもよいこと、ひとつの風、ひとつの水がある。

23. ekai maṭiyā eka kumhārā/eka sabhana kā sirajanahārā//

ひとつの土、一人の陶工、全員の創造者は一人。

24. eka cāka saba citra banāī/nāda bindu ke madhdhi samāī//

ひとつの轆轤ですべての形を造り、〔造られた人みな〕ナーダ（氣息）とビンドウ（精液と血）のなかに収まる。*

* 「ナーダ」（nāda）はタントラの一般的な教義によれば、宇宙の「根源的な音」で宇宙の原因の意味であるが、ここでは、BGの解釈による。

25. vyāpika eka sakala kī joti/nāma dhare kā kahiye bhoti//

すべてにひとつの光輝が遍満しているが、〔多くの〕身体と名称をもち何と呼べばよいか。

26. rāchasa karanī deva kahāvairṁ/bāda karairṁ gopāla na bhāvairṁ//

ラクシャサ（羅刹）の所業を行い〔地上の〕神と呼ばれ、議論をすればゴーパール（最高神）は気に召さず。

27. haṁsa deha taji nyārā hoī/tākara jāti kahairṁ dhaurṁ koī//

ハンサ鳥（個我）は肉体を捨て自存となった、そのジャーティをいいたい何と言うのか。

28. syāha sapheda ki rātā piyārā/abarana barana ki tātā siyarā//

〔その個我は〕黒か白か赤か黄か，無色か有色か熱いか冷たいか。

29. hindū turaka ki būṛho bārā/nāri purakha kā karahu vicārā//

ヒンドゥーかトゥルク（イスラーム教徒）か老人か少年か，女か男か，考えてみよ。

30. kahiye kāhi kahā nahiñ mānā/dāsa kabīra soī pai jānā//

誰に言ったらよいか，言うことを誰も聞かない，奴僕カビールはその〔かれらの〕罪を知った。

sakhī bahā hai bahi jāta hai kara gahe cahuñ ora/

（サーキー）〔苦海に人は〕流れ流れ続けている，手で四方を掴みつつ。

jo kahā nahiñ mānai de dhakkā dui aura//

〔私の〕言ったことを認めなければ，もう二押ししてやればよし。

〈キーワード〉中世インド，カビール，ビージャク